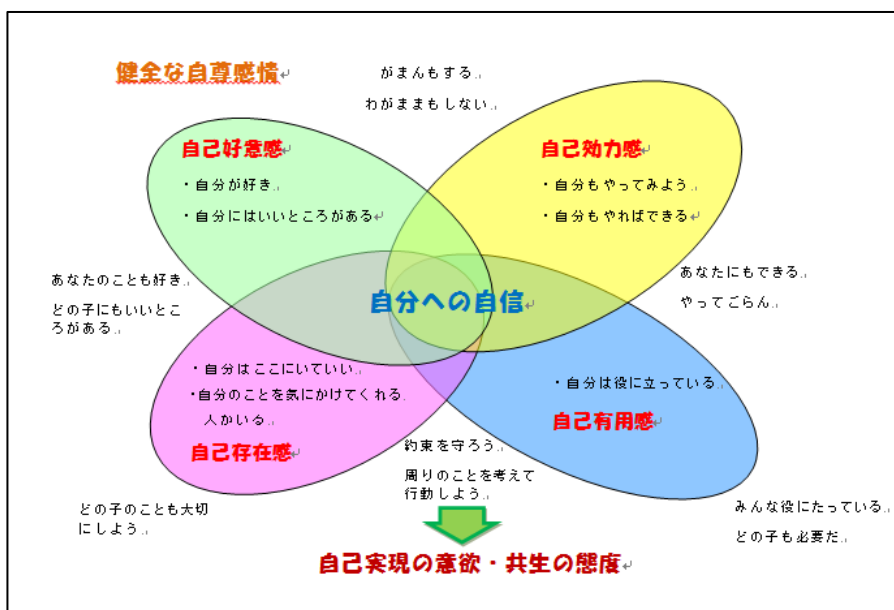


自尊感情を育てる

◇ 自尊感情というのは、自分には価値があり尊敬されるべき人間であると思える感情のことだとされます。学習行動においては、自尊感情が高い人は困難に出会っても粘り強く努力できますが、自尊感情が低い人はすぐにあきらめてしまう傾向があるとされています。

また対人関係においては、自尊感情の高い人は、他人からの賞賛や批判にさほど左右されず感情が安定しているが、自尊感情の低い人は、ほめられるとその相手がいい人に思え、けなされると悪い人に思えるようなところがあり、感情的にも不安定な傾向があります、とされています。右の図は、自尊感情を構造的に見たものということで、前文科省視



学官杉田氏の講演資料にあったものです。この図によると、自尊感情は「自己好意感」「自己効力感」「自己存在感」「自己有用感」で構成されているとなっています。ここで注目したいのは、「自己好意感」「自己効力感」は個に関わるもので、「自己存在感」「自己有用感」は社会（集団）に関わるものだという事です。

◇ 平成 13～15 年度に行われた文科省委嘱研究「児童生徒の社会性を育むための生徒指導プログラムの開発」の報告を読むと、子どもたちの問題点は「社会性の基礎となる部分」、すなわち「人と関わりたい」という意欲そのものが低下しているところにあると書かれていました。そのことが人間関係の希薄化を生んだり、他人を平気で傷つけたり、ルールを守らなかつたり、集団への参加を妨げたり、といった現象になっていくとされています。そして、この研究では、◆他者の存在を前提としない自己評価は、社会性に結びつくとは限らない。◆「自己有用感」に裏付けられた「自尊感情」が大切だ。と結論づけています。

◇ これらのことから、私たちが困り感のある子どもたちに接する場合、考え直す必要があることに気づきます。それは、

「褒めて伸ばす」ではなく「認めて伸ばす」

ということです。つまり、「褒める」という行為は社会性を前提としていないということです。これは「褒める」ことを否定しているわけではありません。「褒める」ことで自信をつけさせることができますし、「自分にはいいところがある」という感情を育てること

も可能です。しかし、「褒める」ことが必ずしも好ましい結果をもたらすとは限らないという認識は必要かなと思ったのです。

- ◇ さて、それでは「褒める」と「認める」の違いって何でしょう？ 文科省が平成 27 年 3 月に出した生徒指導リーフレットに、そのことが書かれていましたので、引用しておきます。

大人の側にしてみれば、この両者の違いはあってないようなものでしょう。「認めてあげようと思って、褒めている」「褒めることは、そのまま認めること」という感覚なのではないでしょうか。そして、多くの子供も、そんな感じで受け止めていることなのでしょう。とりわけ、年齢が低いほど、その差はないに等しいに違いありません。しかし、「認めてほしい」「認めてもらいたい」と強く思っている子供には、そんな大人の言い分は通じないかも知れません。中には、「褒められてもうれしくない」といった子供も出てきたりするのです。一体、何が違うのでしょうか。

大人が子供を「褒める」ときは、一般に大人の基準や水準で「褒める」ことが多いように思われます。そして、大人の側の基準で一定の水準に達した、水準を超えたと評価するのが「褒める」という行為と言えます。反対に言えば、水準に達しない場合には「頑張りなさい」と叱咤激励することはあっても、褒めることはまれでしょう。

それに対して、子供が「認めてもらいたい」ときというのは、一般に子供の基準や水準で「褒められたい」のではないのでしょうか。子供なりのこだわりで努力したり工夫したりしたことを「認められたい」のです。だから、大人の考えた基準に達していなくとも「褒めてほしい」と考えたり、大人の考えた水準に到達して「褒められた」場合でさえ、大人の基準とは異なる子供の基準でも「褒めてほしい」と考えたりするわけです。

だから、自分がさほど努力もしていない、自分の功績ではないことを、「みなさん、よく頑張りましたね」と全員を一括りにして褒められても、さほどうれしくもなく、励みにもならないのかも知れません。子供の実際の行動と向き合うことなく、表面的にお世辞を言ったり、ちやほやしたりしても、子供の「自己有用感」はおろか、「自尊感情」すら高めない可能性が高いのです。

行事に取り組む、学習に取り組む際などに、子供自身に目標や工夫する点、努力する点などを考えさせておき、その基準に沿ってどこまで達成できたのかを評価することが「認める」という行為では重要になります。それが、「自己有用感」を育むのです。単に良かった・悪かったと評価するだけの「褒める」では、「自尊感情」を育むことはできても、「自己有用感」を育むことにはなりにくいのです。例えば、「ふりかえりシート」を用いているのであれば、児童生徒の振り返りに対して、ただ「頑張ったね」とだけ書くのではなく、その児童生徒が「こだわった」「見てほしかった」点に触れた記述を返しましょう。そのためにも、一人一人をきちんと見ることが大切です。

こうやってみてみると、「認める」ことによって、自己有用感に裏付けされた自尊感情を育てることが大事なこともかもしれません。

文責：スギタ